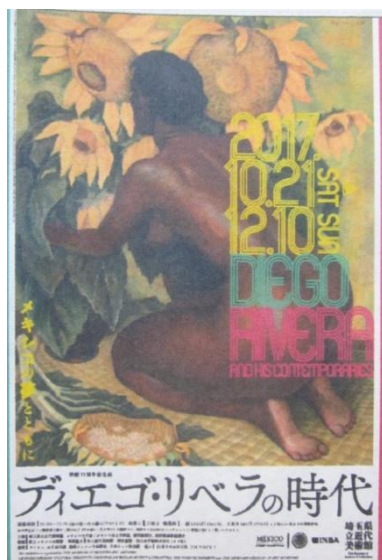


ディエゴ・リベラの時代 メキシコの夢とともに

埼玉県立近代美術館（さいたま市・浦和区） 2017.10.21～12.10



メキシコの美術は、革命後の1920～30年代に独自の展開を遂げて隆盛を極め、世界の注目を集めたが、その歴史を語る上で欠かせないのが、幼少時から美術学校に通い、1907年にはヨーロッパに留学し「キュビズム」（「20世紀初めにフランスで起こった、点、線などの再構成によって立体の本質を表現しようとする絵画の一派」）の画風を試みて脚光を浴びた「ディエゴ・リベラ」（1886～1957）である。

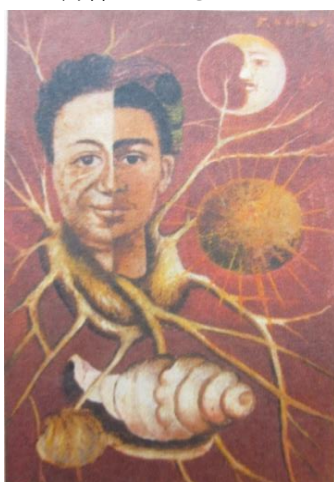
画伯は、20世紀を代表する美術家で、メキシコの社会の動きに目を向け、「ピカソ」や「ブラック」らによる新しい絵画に興味を抱き、公共空間に絵画を描く「メキシコ絵画運動」に積極的に携わった。

そして、メキシコ固有の題材を採り入れた「風俗画」や「肖像画」において200点以上の優れた「キュビズム作品」を制作している。

本展は、「メキシコ国立芸術院」との共同企画により、画伯の初期から晩年にいたる「リベラ」の画業の油彩画、素描、版画など「約30点」に加え、「リベラ」とのかかわりのあった「レオナルド・フジタ」や「北川民次」らの日本人画家の作品も紹介され、メキシコの近代美術の魅力を探るといふ企画である。

《裸婦とひまわり》 1946年 上図

アメリカの女性ダンサーをモデルとし、褐色の肌と黄色のひまわりの対比が鮮やかで、生命力がみなぎり肉感的で力強く描出した作品で、社会性のある壁画とは異なり自由大胆に制作したものと思われる。



フリーダ・カーロ 《ディエゴと私Ⅱ》 1944年

本絵画は、「リベラ」と結婚した「フリーダ・カーロ」の貴重な一点であるが、描かれているのは正面の顔であるが、本人と「リベラ」の顔を半分ずつ合体させ、表情は柔和であるがなんとなく奇妙で可笑しい作品である。

画面は茶系で落ち着いていて、強烈な色彩の印象が強い彼女の絵からすると非常におとなしくて繊細で、画面上に浮かぶ貝殻や月、首にまわりつく枝と「フリーダ」の不安と希望が象徴的なモチーフになって、二人の複雑な関係が見てとれる作品である。